



- ・進んで学ぶ子
- ・思いやりのある子
- ・がんばる子



絵本「希望の木」文：新井満 絵：山本二三



3・11から丸4年が過ぎた。“奇跡の1本松”はその後どうなったろう。陸前高田市は苦渋の決断を下した。「モニュメントにして、永久保存する。即ち、松の幹に炭素センイ強化プラスチック製の心棒を通し、枝葉の部分はレプリカとする…」。1本松の剥製化である。2012年9月12日奇跡の1本松は切り倒され、9か月後の2013年6月8日、震災復興を象徴するモニュメントとしてよみがえった。奇跡の1本松のツギキ4兄弟（ノビル、タエル、イノチ、ツナグ）はその後どうなっただろう。どうやら元気らしい。奇跡の1本松の樹上にあったたくさんの松ぼっくり。そこから採取した75粒の種をうえたところ、9個の新芽が発芽した。奇跡の1本松の赤ちゃん誕生、というわけである。大切な人々を亡くした悲しみはあまりにも深く、「いつそ自分も死んでしまいたい」と思い始める被災者が少なくないという。でも、死んではいけません。生きのこったことにはきっと意味があるのです。はたすべき役割あるからです。それは、いのちのバトンを手渡すこと。どうか生きて生きて生きぬいてください…。そんな祈りをこめて私は、写真詩集『希望の木』を書いた。そしてこのたびは、同書を原作とした絵本を出すことにした。子どもたちと若者に向けた絵本を出版することによって、私もまた私自身の役割をはたしたいと考えている。どうか一日も早く、東北の空に愛と平和が訪れますように…。合掌。

【2015年5月 新井満】

7月6日（水）の全校集会「校長講話」。

平成23年3月11日、東日本大震災。福島県だけでなく、宮城県・岩手県でも多くの方が犠牲になりました。巨大津波により、人も動物も花や樹木まで一瞬のうちに失われしまったのです。岩手県の陸前高田市の高田松原7万本の松が、たった1本の松を残して全滅してしまいます。なぜその1本だけが助かったのでしょうか？



7万本の松とは、たくさんのファミリーがよりあつまって作られた、ひとつの共同体だったのではないかな。父さん松や母さん松、兄弟松や姉妹松たちが一致団結して、家族の一員である松のいのちを守ってあげようとしたのではないかな。それを他のファミリーたちも応援してあげたのではないかな。だから、その1本松は、助かったのだ…。

<もし、その1本松を人間にたとえたとしたら…>

想像のスクリーンに、擬人化した1本松を写しだしてみました。すると8歳くらいの少女の姿がうかんできました。名前は何とするかな…。そうだなあ…。レイラ。そう、レイラにしよう。ふだんの私は、小説を書いています。

<松の木の少女レイラは、なぜ生きのこったのか…？>

そんなことを考えているうちに、こんな物語がうかんできました。松の木の少女レイラと家族の物語です。



あの日一。巨大な津波が襲いかかってきたあの時、レイラはあまりの恐ろしさに思わず両手で耳をふさぎ、まぶたをとじました。でも、父さんはとても勇敢でした。父さんはレイラをかばうように、仁王立ちに立ちはだかりました。それから、ものすごい勢いで押し寄せてくる津波に向かって、叫び続けたのです。

「くるなー！」「くるなー！」「この娘のところだけには、くるなー！」

両腕を大きく広げ、枝という枝、葉という葉をいっばいに広げながら、レイラを津波から守ろうとしてくれたのです。



「あの娘を、守れー！」「あの娘だけは、津波から守れー！」

そうして7万本の松の木がすべて流され死にたえた時、なぜかレイラひとりだけが、生きのこっていたのでした。…。わたしは、夢をもつことにしました。いのちを伝えること。父さんと母さんからもらったこのいのちを、今度はわたしから子どもたちへ、子どもたちから孫たちへと、次々に伝えてゆくのです。“いのちのバトン・リレー”です。そうしていつの日かー、わたしのからだから出発したたくさんの子孫たちによってこのがれきの海岸を、もう一度、緑の松原に変えたい。100年後、いや350年後のある日、新しくよみがえった高田松原7万本の松の木たちの“おかあさん”にわたし、なりたい…。なれるかなあ。きっと、なれる。そう、信じたいです。レイラは、子どもたちのために歌をつくりました。『いのちのバトン』という歌です。



子どもたちの感想 (〇:学年)

レイラへ。ひとりでかなしくない。みんながまもってくれたいのち、たいせつにしてね。がんばってね。①

すごくかなしい絵本でした。わたしは、もうなきそうになりました。つなみがきても、まつの木が1本のこったのがすごかったです。②

レイラへ。がんばってね。ひとりぼっちでさびしいね。だけど、みんながいるよ。①

レイラは、レイラの家族のぶんまで生きよう！という気持ちがいいと思いました。「きぼうの木」という本は、いのちをつたえているようでした。③

わたしは、レイラをまもるほかの木たちがすごくやさしいなあと思いました。すごくかんどうしました。③

レイラは、津波でひとりぼっちになってかわいそうでした。もしもわたしがひとりぼっちになったら、生活できないと思います。これからも家族を大切にしたいです。命を大切にしていきたいです。④

すごくながいおはなしだったけど、にんげんとしょくぶとどうぶつ、みんながんばって生きてると思った。③

ぼくは、なぜ1本松（レイラ）が残ったのかが不思議に思いました。校長先生に、もしも、自分が1本松だったらどう思うかや、作者の気持ちを教えてもらったと思います。ぼくは、死にたいなあと思っていたレイラのようにではなく、やっぱり生きて行こうと見直してくれたレイラみたいに、生きられる分まで生きぬこうと思いました。⑤

作者が松を人間に例えたのがすごいなあと思いました。7万本の松の1本松を6万9999本の松が必死に守ろうとしていたのも分かりました。これからも地球のために自然のために、森林や緑を守るようにしたいです。本当に奇跡の1本松です。6万9999本の松が亡くなってしまったのは残念だけれど、1本松（レイラ）は夢を見て、レイラ自身が変わったのがすごかったです。私は、1本松（レイラ）がたくましく思いました。⑤

「希望の木」の本を読んでもらい、「いのちの大切さ」を知りました。1本松の「レイラ」のように、せいっぱい生きたいと思いました。私は、東日本大震災を忘れずに、亡くなっていった人たちのことを思い、生活をしていこうと思いました。人以外にも、動物も花も同じように生きている、と思いました。「希望の木」を読みたいと思います。⑥



震災で、7万本もの松が失われてしまいました。人も同じように一瞬にしてなくなることがこれからもあると思います。「希望の木」という本は、1本の松を7万本もの松が守って、その1本の松から命をつなげていきました。人も同じで、命を大切にしなければいけないと、この本を聞いてわかりました。⑥

命を次につなぐために、7万本の松が1本の松を守ったことに感動しました。自分の命が失われると分かっている、巨大な津波に立ち向かった7万本の松も、それを知った後で、一人で生きぬく覚悟を決めたレイラも、強いなあと思いました。きっとわたしだったら一人で生きていけないかもしれないと思いました。なので、わたしもレイラのように強くなりたいです。⑥